

## 第二回「子ども木工作品コンクール」に寄せて

北海道立旭川美術館長 高橋 洋

### はじめに

北海道立林産試験場，北海道林産技術普及協会，日本木材総合情報センターが主催する「子ども木工作品コンクール」も，昨年に引き続き第2回を迎え，北海道各地の多くの小中学校の子どもたちの参加を得て開催されました。

応募総数は，全道から，学校数56校，作品515点に及ぶ多数の参加があり，関心の高さをうかがうことができました。今回の応募作品の特色と木工作指導にかかわる留意点を挙げてみます。

### 受賞作品の印象と応募作品の感想

#### (1) 木工工作部門の作品について

##### 小学生個人の作品

昨年の作品もそうでしたが，このコンクールに応募してくる小学生の作品は，とても夢にあふれたスケールの大きいダイナミックなものがたくさん出品されました。そして，学校ごとにテーマや材料の使い方に特色がありました。

小学校低学年では，図画工作に「造形あそび」があり，「材料をもとにした造形活動の楽しさを味わい，材料から豊かな発想をし・」という活動をするために，内容は「身近な自然物や人工の材料の形や色などに関心をもち，それらを並べる，積む，組むなどの造形遊びを工夫」して，「生活を楽しむ，くするものや飾るもの，想像したものをつくる」ことになっています。

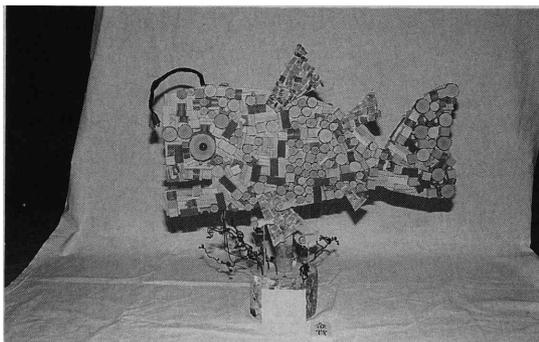
この学習では，材料の形やその持っている色彩などから，子どもが「発見する・思いつく」造形活動の「動機」を重視しています。

この考え方は，高学年まで引き続き重視されており，6年生になっても，「造形的な見方や感じ方を深め・・・」，「見たこと，感じたこと，想像したことを立体に表す...」，「身近な材料の特性を考えて表したり，材料の特性から発想したことを立体に表す...」というように，発展的に学習することになっています。

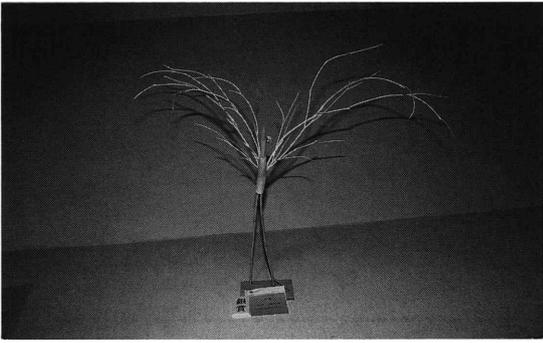
このように，子どもの周囲にある「素材」を教師（あるいは父母）がどう取り上げることかということが，決定的な意味を持っていることに留意したいものです。

今回の「金賞」をとった阿寒町立<sup>（ふるさと）</sup>布伏内小学校の三沢朋有君の作品は，木の端切れを変化をつけながら組み合わせ接着して，実に楽しい「チョーチンアンコウ」を作ってくれました。この作品の出来栄を喜んでいる彼の顔が，この作品の背後に見えるような気がします。

「銀賞」の月形町立<sup>（ふるさと）</sup>札比内小学校4年生の米林香菜恵さんの「サギ」は，木の小枝の特徴をそのまま生かし，枝の形と皮をはいだ滑らかな木肌の



金賞「チョーチンアンコウ」



銀賞「サギ」



銀賞「カモシカ」

白さをよく生かして、幻想的な「サギ」をよく表現しています。この学校からは、同じ材料を使った夢にあふれた作品がたくさん寄せられました。昨年もたくさんの作品が応募された学校で、指導に当たられた先生が、地域に豊富にある材料の積極的な活用、また、その特性の生かし方を研究された結果だと思えます。

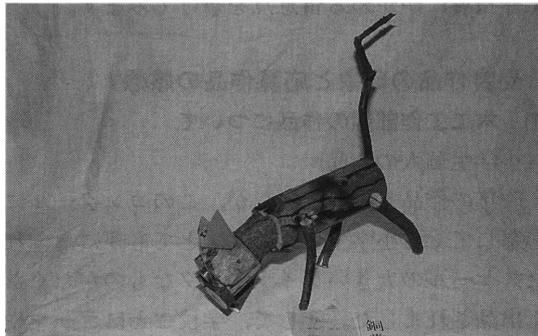
同じ「銀賞」の池川市立江丹別小学校の河野紗穂さんの「カモシカ」も、素材の木の枝の特徴がよく生かされ、顔の表情や体のしぐさまで実によく表現されたダイナミックな作品でした。

「銅賞」の布伏内小学校の土居麻美さんの「恐竜」、江丹別小学校の岸本恵介君の「ねこ」も、同じように材料から発想した、なかなかおもしろくよくできた作品でした。同じ学校の子どもたちの作品は、どれも木の性質や形の特徴をよく生かして工夫されていました。

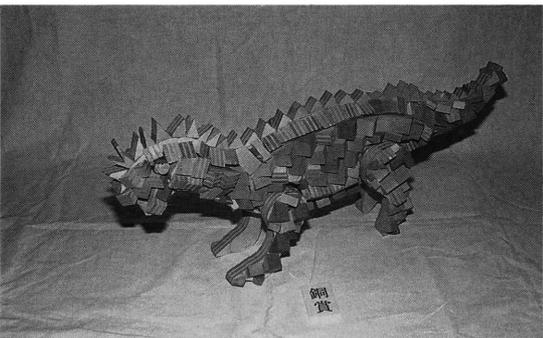
同じ「銅賞」の中標津町立若竹小学校の大井志穂子さんの「飛ぶ」や同じ学校の子どもたちの作

品は、木の形を組み合わせる中から浮かんでくる「イメージ」を表現した作品で、現代のいろいろな材料も活用する新しい「生け花」の世界のように、抽象的な表現ですが大変楽しい作品でした。

旭川市立北光小学校、新冠町立明和小学校、滝上町立濁川小学校の子どもたちの作品も、素材の活用の仕方と「題名」のつけ方が大変おもしろく、とてもよくできていました。



銅賞「ねこ」



銅賞「恐竜」



銅賞「飛ぶ」

子ども時代の想像力や構想力というのは、このような身近にある材料と直接触れることで、こんなに広がっていき、体と手を工夫して使うことで、更に思考力や技術が深まり、向上することがよくわかるような気がします。

#### 中学生個人の作品

中学校美術の内容の「工芸」領域では、「工芸のデザインの構想を練ること、制作の計画を立てること、材料や用具の特性を生かし、工夫してつくること」が重視されていますが、授業時間が不足気味の条件の中では、時間を掛けた大きな作品を作る機会が少なくなっています。

しかし、中学生の年代になると、好きな生徒は時間があれば相当に熱中して制作に取り組むものですし、自分の生活に必要なものを見つけだし、それを自分の個性的な発想で生かし、身近な材料を見つけて、素材の特性を生かす工夫をしながら、創意に満ちた作品を作るものです。

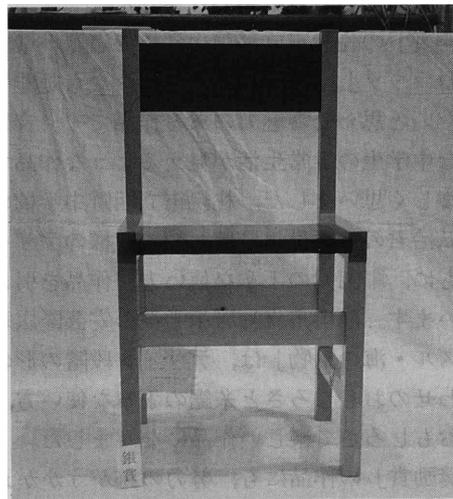
今回の「金賞」受賞作の北海道教育大学附属函館中学校の及能大輔君の作品「光と影」という照明器具は、中学生らしい夢と各種の木の特性を生かすよう工夫された優れたデザインとなっています。「経木」のように薄くした板からの透過光は木の年輪を浮き立たせ、組み合わせられた細木のすき間からもれる明りと影となる部分のコントラストが美しい作品です。

「銀賞」の札幌市立稲穂中学校の伊藤義浩君の「椅子」は直角を生かした椅子ですが、無駄のないデザインで特に組み立てがしっかりしていて人の体重を支える強さがあります。その上、塗装で

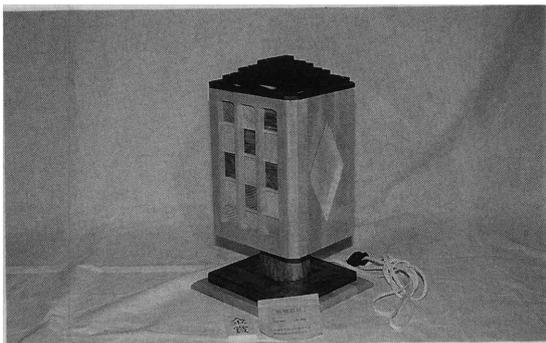
明暗のコントラストを強調しており、よいデザインとなっています。昨年も、この学校から優れた大きな作品が多く出品されていますが、やはり、指導に当たる先生の適切な助言と意欲的な生徒たちが一緒になって、デザインや製作に取り組んでいる様子が見えがえします。

旭川市立神居中学校の高木千夏さんの「木象嵌・時計（地球）」は、デザインのおもしろさと緻密な計画・注意深い作業による薄板の切り抜きとはめ込み、さらに種類の異なる木の色合いの違いを活かした組み合わせなど、部屋に飾りたいという気持ちがこもったよい作品でした。

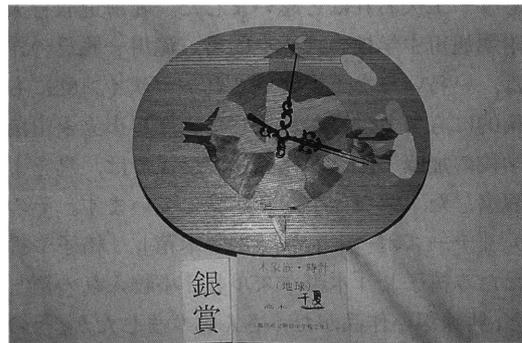
この二つの作品は、実用性と装飾性という点で対照的でしたが、両方ともデザイン段階の構想の練り方、製作過程での正確で緻密な作業工程を根



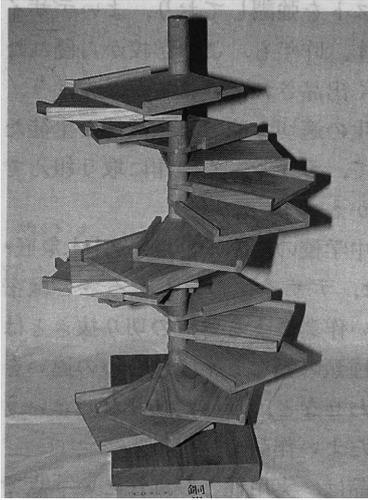
銀賞「椅子」



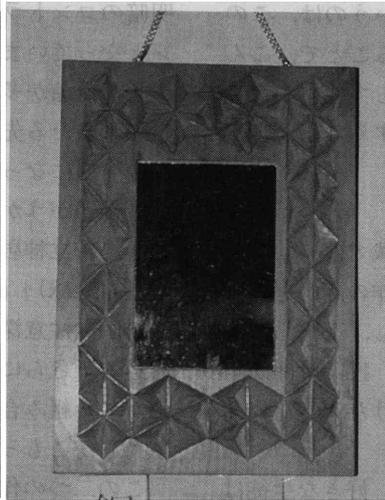
金賞 照明器具「光と影」



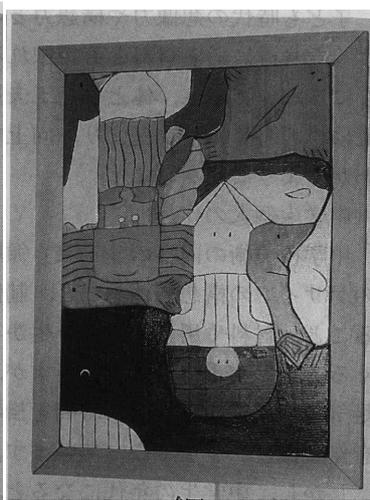
銀賞「木象嵌・時計（地球）」



銅賞 「のラック」



銅賞 「額付鏡」



銅賞 パズル「海の動物」

気よく進めている点に感心しました。

「銅賞」の札幌市立稲穂中学校の斎藤一哉君の「のラック」は、オーディオファンなら是非手に入れたと思わせる魅力のある作品です。音楽が好きな中学生の日常生活が見えるような作品で、微笑ましく思いました。札幌市立西野中学校の矢ヶ崎弘治君の「額付鏡」は、額の模様（てがめ）のデザインとともに、彫刻刀の丁寧な使い方が作品を引き締めています。旭川市立神居中学校の安芸隆広君の「パズル・海の動物」は、デザイン段階の形の組み合わせのおもしろさと糸鋸（いとのこ）の丁寧な使い方、彩色のおもしろさで楽しい作品になりました。

「奨励賞」の作品にも、努力の跡がうかがえる作品がたくさんありました。大きな「三輪車」を作った札幌市立稲穂中学校の薩田学明君、構造的にもう一工夫あればと思いました。北海道教育大学附属池川中学校の梶間卓朗君、滝川一雅君の作品は、いろいろな工夫が見られ、デザイン的にも扱術的にも努力が見られました。旭川市立永山南中学校の加藤千紘君の作品「デコイ」は、鳥をよく観察した丁寧な仕事ぶりが光っています。その他、「チーズボード」や「木彫木箱」、「椅子や折りたたみ椅子」、「木彫パズル」、「小物入れの箱」など、興味深い作品がたくさんありましたが、そのいずれも、材料が「規格品やキット製品」を活用

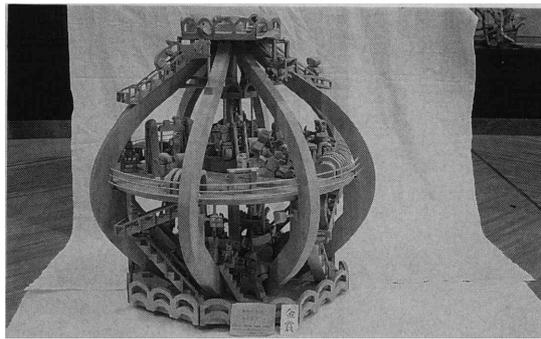
したことから類似した作品が多く出てきましたが、デザインの段階で、自分の夢を大切にしたい構想をよく練ること、技術的な応用の部分で自分なりの工夫をもっとやってよいのではないかと思います。

小学生団体の作品について

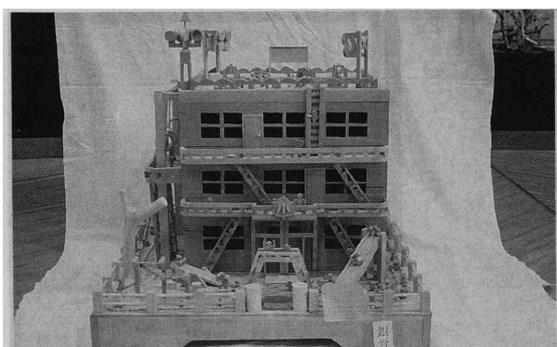
「金賞」は、置戸町立勝山小学校6年生の「動物たちの玉ネギドーム」が選ばれ、「銀賞」は、同じ学校の5年生の「アスレチック学校」、同じ4年生の「エジプトランド」です。

置戸町は木工クラフトの町といわれ、子どもたちも小さいときから、地域産業である木工の仕事を見て育っていること、また、子どもたちの作品製作には、両親や地域の大人たちの強い支援と協力があることが考えられます。

地域にある豊富な素材と必要な道具や機械の提



金賞 「動物たちの玉ネギドーム」



銀賞 「アスレチック学校」



銀賞 「エジプトランド」



銅賞 「森の音楽会」



銀賞 「地図パズル」

供、子どもの製作活動に対する物心両面の支援など、環境的に恵まれれば、小学生でもここまでできるといういい例です。

この作品は、どれを見ても子どもたちの夢があふれています。皆で話し合って決めたテーマ、作業の分担、全体を組み立てていく協力的な活動があったものと思われます。昨年も、この学校は素晴らしい共同作品を送ってくれました。

「銅賞」には、旭川市立北光小学校の4年生の共同作品「森の音楽会」が選ばれました。表情が豊かに表現された楽しい作品です。

この団体の部は、今後どの学校でも積極的に参加してほしい部門です。

く中学生団体の作品について

中学校からは、苫小牧市立弥生中学校の特殊学級の作品「地図パズル」の応募だけでしたが、一生懸命に社会料の勉強に役立つ作品をつくったこの学級の諸君の努力には、敬意を表します。

中学生では、時間をかけてデザインの構想を練り、手順や計画を緻密に立てて、技術を習得しながら共同作業を進めることができれば、大人も脱帽するような素晴らしい作品を製作できるように思います。来年の応募を期待します。

## (2) レリーフ部門の作品について

薄い木材を、色を混合した接着剤で積層に貼り合わせた新しい製品を使っただけの作品です。

小学生の部の作品

「金賞」は、帯広市立緑丘小学校の前田尚子さんの「エンゼルフィッシュ」が受賞し、この魚の可愛らしさや体の模様がよく表現されていました。

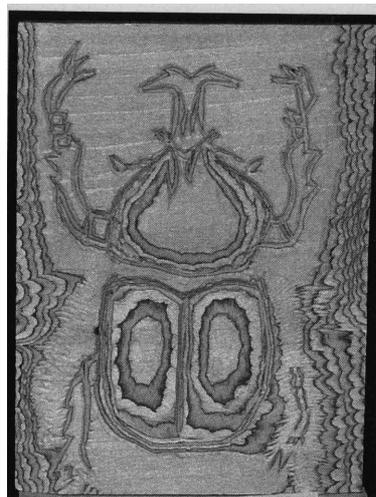
「銀賞」は、旭川市立西神楽小学校の土野歌奈子さんの「花とちょう」、同じく三村英之君の「かぶと虫」の2点ですが、二人とも、昆虫や花をよく観察して特徴をしっかりと表現していますし、この材料の積層の特性をじょうずに活用していま



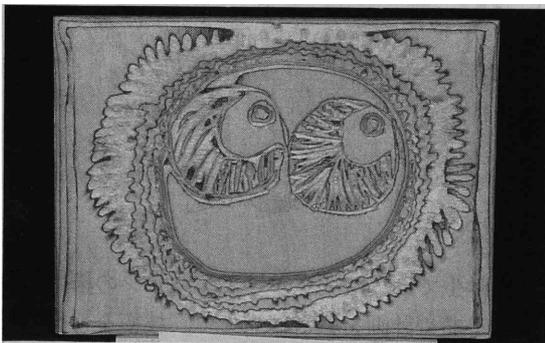
金賞 「エンゼルフィッシュ」



銀賞 「花とちよう」



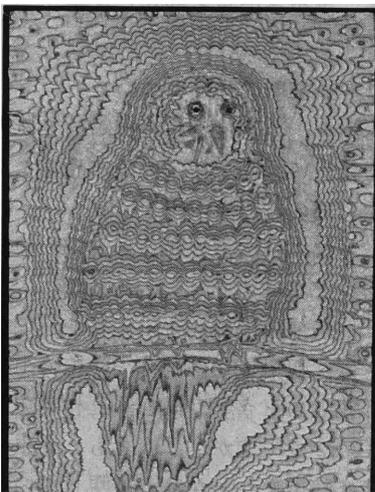
銀賞 「かぶと虫」



銅賞 「フヨブヨ」



銅賞 「夏の思い出」

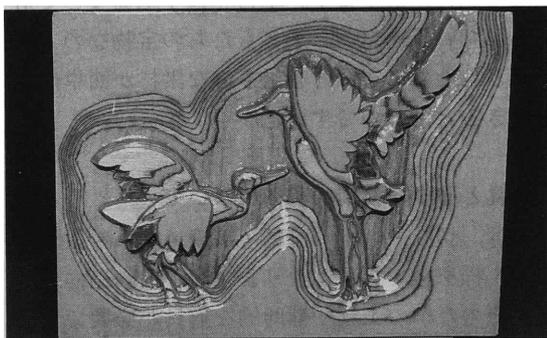


銅賞 「ふくろう」

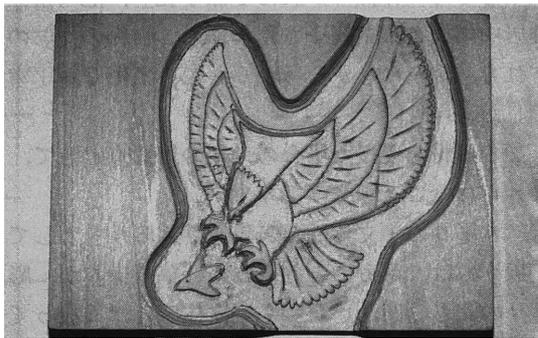
した。「銅賞」の旭川市立聖和小学校の大木賢太郎君の「フヨブヨ」は、ユーモアのある楽しい作品ですし、帯広市立緑丘小学校の富田隆浩君の「ふくろう」、旭川市立千代ヶ丘小学校の小野寺英里さんの「夏の思い出」も、楽しい雰囲気のある丁寧な仕上げの作品です。

中学生の部の作品

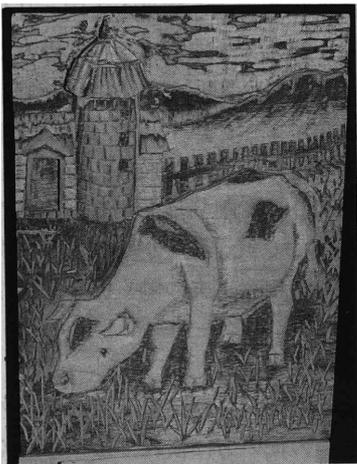
「金賞」には、当麻町立当麻中学校の太田英之君の「湿原の鳥」が選ばれましたが、下絵段階からデッサンが丁寧に描かれているという感じがし、



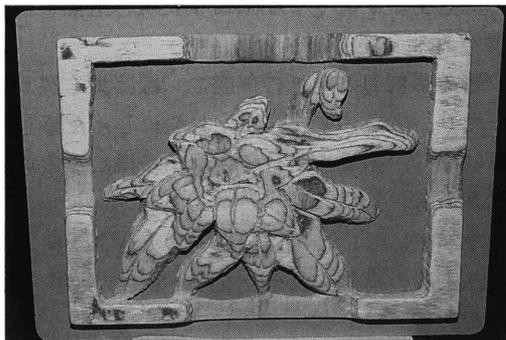
金賞 「湿原の鳥」



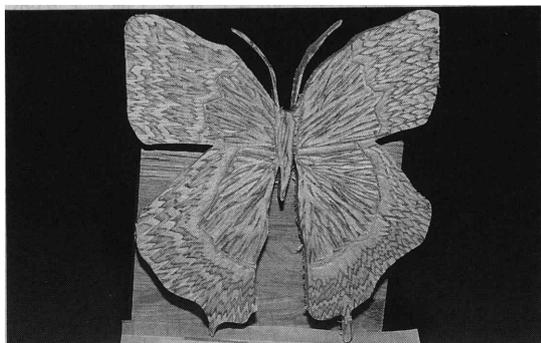
銅賞 「ワシ」



銀賞 「牧場」



銅賞 「かれんざ漂う花」



銀賞 「蝶」



銅賞 「白樺の木」

彫りによる線の効果や彫り下げの深さもよく計算されています。

「銀賞」の北海道教育大学附属旭川中学校の渡辺優大君の「牧場」の風景は、絵画的な表現で成功していましたが、材料の規格がこの倍以上あっ

たら、もっとおもしろくなったと思われます。旭川市立北都中学校の奥山剛君の「蝶」は、線の表現が成功しています。

「銅賞」の北海道教育大学附属旭川中学校の設楽和人君の「ワシ」、旭川市立永山南中学校の徳

山梨恵さんの作品「かれんさ漂う花」、旭川市立神居がやい中学校の東田裕子さんの作品「白樺の樹」のどれも、デッサンがしっかりしていて彫りが丁寧でした。

この素材を使った場合の今後の留意点として、考えられることを挙げてみます。

木彫りの半立体的な表現「浮き彫り」として扱うには、彫ることで現れる「縞模様」が、彫りの深さ（凹凸）がつくる立体感とは異なって表現される。

削ると現れる「縞模様」を予想しながら、その線を生かすような絵画的な表現を重視する必要がある。

彫る彫刻刀の傾きの角度で、線は細く鋭くなったり、太さの変化、かすれやにじんだ感じの線になり、指導や試行で表現が多様になる可能性がある。

中学生には、この倍判以上の大きさが使えれば、表現の構想も大きくなり、密度が増す可能性がある。

積層の色が多様になれば、表現の幅が更に広がる可能性がある。

## 木工作指導上の幾つかの問題

### 「木」という材料について

最近では、従来の板材のほかに、いろいろな合板や集成材が市販されています。この材料は、その原材料の重ね方によって縦横に強い性質があり、活用しやすい材料です。目的によって、木材のこれらの性質を選んで活用することが大切です。

小・中学校の図工・美術（工芸）の授業でも、工作は、施設・設備の工具の不十分さ、個人差の大きい作業だけに必要な授業時間確保の難しさ、材料の準備に手間と時間がかかることなどが挙げられるように思います。

既製品の「キット商品」や規格材料のセットを活用することが多くなっており、自由に材料を選び、工夫してものを作る機会が減ってきています。

いろいろな形をした板の端材の方が子どもの想像力を刺激し、工夫が動き、おもしろい工作が生ま

れる可能性があります。木材を扱う工場などで捨てられている端材が、子どもたちの宝物なのです。

子どもたちにもっと各種多様な素材が簡単に提供できるというのがいいのですが。

## 工具と必要な技術の習得について

木は、切断・切削・研磨・接続・接着・塗装などの工程を経て製品となりますが、その過程では、必ずそのための工具や補助的な道具が必要です。

日曜大工を趣味にする大人のいる家庭は別にして、工具の手入れ、家具の小さな修理、柵や踏み台・箱ものを作るような簡単な大工の技術を、家庭で子どもが目にする機会は少なくなりました。

「プラモデル」に類した木のホビー製品が出てきていますが、すべて規格品のパーツを組み合わせ接着するだけの作業で、後は、はみ出している部分を「やすり」で削り落とすくらいの作業が残されているだけです。仕上がりの良さは別にして、ものづくりでの創意工夫の働く機会がありません。

### (1)「ノコギリ（鋸）」

最近の子どもは、「縦びき・横びき」の刃を持つ「両刃鋸」の使い方に慣れてはいません。

子どもは、性急にひいたり無理に押して使うようで、「ノコギリ」の傷みが激しいのもそのせいです。正確に鋸を立ててゆっくりと「挽く」のが原則で、特に「ひきはじめ」の位置を正確に決めて「ノコ道」をつけることが大切です。

手でひくものや電動の「糸ノコギリ（電動糸鋸盤）」、あるいは「ジグソウ（曲線びき鋸）」でも、歯に無理をかけないように材料を盤に押し当て、ゆっくりと押し進める必要があります。

無理な使い方は、工具を傷めると同時に、折れた刃は、けがにつながります。材料を固定する工作台的保持具（万力やクランプ）の活用が、児童生徒の場合は特に必要です。

### (2)「カンナ（鉋）」

手元に引いて使う日本のカンナのほかに、最近では、押して使う西洋式のカンナが出てきました。

「ノコギリ」も同じですが、力の弱い子どもでは、引くよりも押す方が体重を掛けられるので使いやすいようです。

経験が少ない中学生でも、同じことです。どちらにしても、刃が切れなければ無駄な力ばかり必要になり、仕上がりがよくありませんし、カンナの台と刃の出し方の調整を知らなければ、使いこなせません。指導が必要な段階です。

最近では、カンナに代わって電動の「サンダー」や「紙ヤスリ」による仕上げが多くなりました。一つには、合板や半製品の材料を使う工作が多くなったことによると思われます。

この技法とノミなどの「刃物」を同時に使うと、木に食い込んだ研磨用の粒子のために、刃物は切れなくなることを知る必要があります。

### (3) 「ノミ・彫刻刀」

ノミは、刃の厚さによって、叩いたり、押ししたりするときの刺さっていく角度、進み方が違ってきます。電動ドリルなどで、ガイドとなる穴を開けてからノミを使う方法が適切です。原則的には、少しずつ薄く削り取っていく気持ちが大切なことです。

「突きノミ」や「彫刻刀」の使い方が必要なことは、一方の手で押すことと同時に、もう一方の手や指先で行き過ぎを押さえる力を同時に使う技術を体得することです。刃が切れなければ、それだけ無理な力を加えることになり、材料からノミの刃がそれたときは、危険な状況が生じます。切れる刃物ほど、コントロールするにも無駄な力が要らず、けがも少ないのです。

最近では、工作用の刃の厚い「カッターナイフ」もありますが、ナイフの刃に無理な力（「こねる・横に曲げる」など）を加えると折れやすく、ときには折れてはねることがあり、危険です。

よほど薄い板材でなければ、カッターナイフでの作業は無理だと思った方が安全です。

### (4) 材料をつなぐ工具と技術

釘による接合 ……子どもは、「金槌」が上

手に使えず、釘が曲がって板の側面からはみ出す、釘が途中で折れ助がるのは、よく見られる光景です。釘を真っすぐ打つには、金槌の平らな面で直角に打つ必要があります。曲面の方は、釘の頭を最後に板に打込むときに活用するものです。釘を打つ場所に「四つ目キリ（錐）」で小さい穴を先に開けておくと曲がりにくく、また、市販されている抜けにくい「スクリュー釘」などを活用すると固定しやすいものです。いずれにしても、材料を真っすぐに固定して作業をすることが、大切です。

中学生になれば、「欠きつぎ・ほぞつぎ・留めつぎ・だぼつぎ」などの技法も簡略化した形で経験させたいように思います。

合成糊による接着……「ボンド」などの名で知られる酢酸ビニル樹脂エマルジョンや2液混合のエポキシ系接着剤、さらに木工用の瞬間接着剤などもあり、木材の木口や木端を強固に接着できます。

はみ出した糊をきれいにふきとること、完全に固まるまで動かさないよう固定しておくことが大切です。そのためには、材料の両側に板切れを当ててそれを紐で縛る固定の仕方やクランプなどによる固定の工夫をする必要があります。板を直角に接着するときなどは、角に板切れを添え、角度を確保する手立てが必要です。作業を急がず材料をしっかりと固定して、接着剤が固まるまで待つことが必要です。

### (5) 仕上げの材料と技術

塗装仕上げは、表面の保護と美化（デザイン）という二つの目的があつてすることですが、小学生では、白木のままの仕上げや絵の具の彩色の上に「ろうワックス」仕上げなどの簡単な塗装でも済みます。

一般的には、「砥の粉」による目止め、「オイルステイン」による着色、「ラッカーやニス」による塗装の工程が通常です。「ラッカー」は揮発性の「シンナー」で薄めて使うので、急性中毒を起ささないように室内の十分な換気への留意や誤

つた興味で乱用することのないよう、その害について十分な指導が必要ですし、使い残りの「シンナー」の管理には、特段の注意が必要です。小学校段階では、溶剤にアルコール類を使う「ニス」の方が無難のように思います。

切れない刃物ほど不必要な力が加わり、特に、保持具なしに手で押さえての作業は、思わぬ大けがを招きます。最近、自分で「トイシ（砥石）」で刃物を研ぐことがなくなり、仮に研ぐとしても、簡便な研磨用の道具で代用しています。これで研いだ刃先を指の腹で触ってみても、二つ折りにした薄い紙を切ってみても、刃がザラついて引っ掛かる感じが残ります。中学生段階では正しい刃物の研ぎ方を教えたいものです。

#### 木工作指導の今後への期待

##### (1) 知能の発達と「ものづくり」

手は「外部にある第二の脳」といわれ、手や指

を使うことは、脳を刺激し知能を発達させます。

素材に触れて触発される想像力、作りたいものをイメージする構想力、材料の特性の生かし方・活用できる工具や必要な道具から工程の手順を考える計画力、製作過程における技術的な応用力、工程を的確に進める集中力と持久力、必要に応じて役に立つ情報を収集・活用する能力など、工作は知識だけに終わらない総合的な学習で、より大きな「創造力」や人間的能力を育てます。

##### (2) 自分の個性や独自性の発見

「もの」を大切にすることは、自分の心を込めて作った作品を大事にすることから始まりますし、工作の学習は、既製品では感得できない自分の個性や独自性の発見につながる重要な学習です。

学校でも、家庭でも「工作教育」をもっと重視してほしいと思います。